

## 『ソーシャルワーカーデーin やまぐち 2014』 を開催しました。

平成 26 年 7 月 21 日（祝）13 時 30 分から、山口県立大学において「ソーシャルワーカーデー2014in やまぐち」が開催されました。

「ソーシャルワーカーデー」とは、さまざまな職場で働くソーシャルワーカーの話の聞いたり、ソーシャルワーカーの仕事や取り組んでいることを紹介する日です。本会では初めての取り組みとして山口県立大学の共催を得て実施しました。

今回“ソーシャルワークとは何か”というテーマで、これからソーシャルワーカーを目指そうという方(学生、社会人など)、ソーシャルワークに興味のある方や県内の様々な分野で活躍するソーシャルワーカーが集い、日頃の活動報告を行うと共にソーシャルワーカーの一層の連携を深めその存在と役割を発信することを目的に開催されました。



【会場の様子】

参加者は、学生・社会人などこれからソーシャルワーカーを目指そうという方 12 名、ソーシャルワークに興味のある方が 3 名、社会福祉士、精神保健福祉士、医療ソーシャルワーカー等が 14 名、山口県社会福祉士会正会員 56 名の計 85 名の参加がありました。

主催者を代表して本会白石会長より「2009 年より海の日をソーシャルワーカーデーとして、ソーシャルワークに対する関心と理解を深めることを目的に全国的に啓発行事が展開されています。山口県社会福祉士会においても“まずはやってみよう”と決定し、今年度初めて山口県立大学との共催で企画しました。

近年、高齢者の行方不明や詐欺被害、陰湿ないじめや自殺、限界集落等の地域崩壊、災害での被害者支援や地域防災、虐待、老老介護の急速な増加など緊急に取り組まなければならない多くの問題が指摘されています。このような課題解決には、人材・システム・財源の充実確保、とりわけ人間の尊厳と生活、コミュニティに視点をあて、総合的なヒューマンサービスを担う福祉専門職、ソーシャルワーカーへの期待が高まり、確実に活躍のフィールドは拡大しています。しかし「ソーシャルワークとは何か」、社会一般に十分な理解がされているとは言えません。このソーシャルワーカーデーを契機に、関係者がさまざまな機会に理解の輪を広げていかなければなりません。皆様には「ソーシャルワーク」について理解を深め、啓発活動に協力いただければ幸いです。」と挨拶がありました。



【会長挨拶】

## ✿ 基調講演

まずは、基調講演として「ソーシャルワークとは何か、その未来構想図を描く」と題し、山口県立大学の横山正博教授にお話をいただきました。

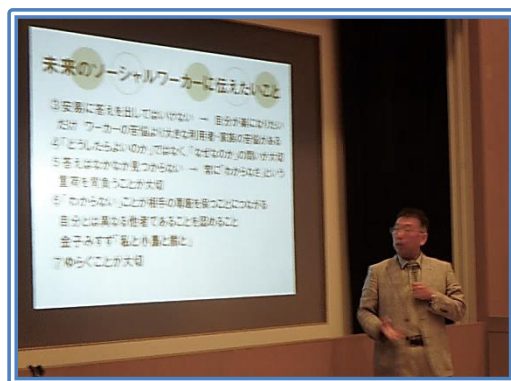
横山教授が社会福祉を目指されたきっかけは、学生時代に出会った（福井達雨、1980『あほかて生きているんや』教文館）という1冊の本であったことでした。その本を読み“信頼をきずなにしてできる仕事、信頼の中でできる仕事がしたい”と思い、ソーシャルワーカーになりました。実際にソーシ

ャルワーカーとして利用者や生徒に関わり、問題に直面した時には悩み・考え・気づかれたことなど、ご自身の経験を通してお話されました。最後に、未来のソーシャルワーカーに向けて、「迷ったときには原体験に立ち返ろう。大切にしたいこと、希望を持ったことがある



【基調講演】

はず。ソーシャルワークとは信頼をきずなにしてできる仕事である。そして、わからないことが相手への尊厳を保つことに繋がる。また、ゆらぐことが大切。私たちソーシャルワーカーは、ケアプランなどの見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めて大切にしていくことこそ、重要なのです。」と、ソーシャルワーカーとして大切にしたいことを、熱く伝えられました。



【基調講演】

## ✿ シンポジウム

その後、シンポジウムでは、司会を本会白石会長、コーディネーターを本会正会員橋康彦氏が担い「ソーシャルワークとは何か～実践現場から考える～」をテーマに3名の方に普段携わられている業務を通じ、どのようにソーシャルワークを実践されているか発表いただきました。



【シンポジウム様子】



【山根千絵氏】

まず始めに、山根千絵氏が「社会福祉法人防府海北園 子ども家庭支援センター海北」の業務と役割、課題等について発表されました。

児童家庭支援センターは、問題を抱えた地域家庭への相談支援を行っており、継続して支援が途切れないようにしていることなどの現状を話されました。

また、不登校児との関わりや里親支援についても説明がありました。変わりゆく社会背景の中で日本はまだまだ子育ては家庭がするものという意識が根強く、

また、児童虐待にしても、加害者の親が責められたり

しているが、その背景には親も困っているなど、様々な背景があるのだということ。そんな問題に対して、研修を受けたり、他領域や関係機関などに関わってもらい、助けてもらったり協力しながら皆で助け合いながら、自分にできることをしています。そして、子どもやその家庭の権利を守ることや背景にあるものを理解するよう努めていますと話されました。

発表の後の質疑応答で、「不登校児や引きこもりに対してどのような対応をされているのか」という質問に対して、例えば、スクールソーシャルワーカーに学校側や家庭側との間に入ってもらう調整をしてもらっている。と関係機関との協力の例を示されました。

続いて、「山口刑務所企画部門分類担当」齋藤なお氏が発表されました。

まず始めに、受刑者が刑務所から出所しても、生活が困窮したため再び罪を犯し、入所してくることが繰り返えされている。望まぬ再犯を断ち切るためにソーシャルワーカーが配置されるようになったのだと刑務所内にソーシャルワーカーが配置された社会的背景について説明がありました。

実際の業務の流れとして、軽度の知的障害者やアルコール・薬物依存症者、生活困窮者などの対象者の掘り起こしを行っており、そのような疑いがある受刑者の情報収集をして、刑務官に連れて来てもらい面接を実施している、と一連の業務の流れの説明がありました。その中で課題は、刑期満了日までという期限があることや、利用できる社会資源の限界があるなど、課題も多くあるのだと話されました。

最後に、ソーシャルワーカーとして、出所後の希望を聞いたり、病院や施設側へ受け入れる側への心配を減らすため情報提供をしていることなど、皆が安心できる関わり、連携や人とのつながりを大切にしていると話されました。



【齋藤なお氏】



【讃井康一氏】

最後に、「結い後見事務所」讃井康一氏が社会福祉士の存在価値とは？～独立型社会福祉士の立場から考える～というテーマで話されました。

はじめに、合同会社結い後見事務所についての説明があり、どこの組織にも属さずに自由裁量と自己責任でもって業務を行なっている、主な業務として成年後見活動を実施していることを話されました。後見活動の業務内容としては被成年後見人の預貯金の管理や各種手続きなど被後見人によって様々なであることを話されました。

社会福祉士として、自分だったら…と、立場を置き換えて想像してみること、また、個人の存在、生き方を尊重することを大切にしたいと話されました。

最後に社会福祉士に期待される役割として“つながりをつくり、つながりを活かすこと”そこに社会福祉士としての存在価値があると言われました。

発表後、コーディネーター、一般社団法人山口県社会福祉士会 橘康彦氏より各シンポジストに対し、質問で発表の内容をより深めていかれました。

フロアからも、里親支援に対する現状や課題やエール、刑務所と連携されている機関の方からは刑務所にSWが配置されていることで連携が取り易くなっていること、同じように独立型社会福祉士として活動されているワーカーから経済的な面での課題の話などの意見交換が行われました。



【質疑応答の様子】



【副会長挨拶】

最後に、本会副会長の上野綾乃より、「ソーシャルワーク実践分野は多岐にわたってきた。専門分野別で当然ながら視点の置き方や必要な知識は違ったとしても、根底にある利用者・ご家族とのかかわり方は共通であることが最確認できました。このような研修会を通してネットワークを作りましょう。」と挨拶がありました。

参加者の皆様からは、「社会福祉士、ソーシャルワーカーについて何も知らなかったが、今回良く分かった。」「横山先生の講演を聴き、現在の仕事の見直し、整理、そして大切なことに再度気づききっかけになりました。」「自分自身で迷っていること、不安に感じているこ

とを解決するヒントが沢山あった講演でした。」「専門分野ではない事柄を深める機会が少ないためとても勉強になった。」「児童や刑務所や独立型社会福祉士の実際の仕事内容を知ることができ、ソーシャルワーカーがいろんな場で活躍されていることを知りとても勉強になった。」「普段見れない部分を見る機会があるといいかと思えます。」「働く場所が違っててもSWが大切にしていることは同じであり、そこが一番大事なことであった。」など沢山の意見を頂きました。

本会では、今後も、ソーシャルワーカーデーのイベントを実施する予定です。機会がありましたら、皆様もご参加ください。

ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。



このデザインは主催構成団体スタッフの写真で作成しました

